

オンラインセミナー「正しく知ろう！食物アレルギー」質問と回答

Q1 エピペンは処方薬と説明されていましたが、施設などで予備として用意したい場合の入手方法はありますか。

A1 エピペンは医師の処方が必要な薬剤であり、施設が予備として購入や保管することはできません。ただし、アナフィラキシーのリスクがある施設利用者に対して医師が処方したエピペンを、施設内で保管することは可能です。

Q2 食物アレルギーのある児童の受入れにあたり、エピペンの使い方の講習が受けられる窓口や、保護者への確認・質問事項などが書かれた一覧表はあるのでしょうか。

また、既に食物アレルギーのある児童を受け入れている学童クラブ等で、その児童に対してどのように対応しているのか教えてほしいです。

A2 食物アレルギーのある児童の受け入れにあたり、エピペンの使用方法については、その主治医に指導を依頼するのが一つの方法です。また、市区町村やアレルギー関連団体が主催する食物アレルギーに関する講習会が開催されることもあり、学べる機会が得られる場合があります。群馬大学へ講演をご依頼いただくことも可能です。さらに、エピペンの販売元であるヴィアトリス製薬合同会社のHPでは、教職員・保育士・救急救命士の方向けに使用方法を紹介するガイドブックや動画を公開しています(<https://www.epipen.jp/teacher/index.html>)。練習用トレーナーの貸与についても案内しています。さらに2025年4月頃には、エピペンを処方された患者さん向けにエピペンの適正使用動画として、エピペン実薬動画が公開予定と伺っております。

保護者への確認事項や質問事項については、群馬県の「学校における食物アレルギー対応マニュアル」に参考となる資料があります。管轄は異なるかもしれませんがチェックリスト事項などは参考になるでしょう。

施設がどの管轄に属するかにより異なりますが、例えば放課後児童クラブの場合、「放課後児童クラブ運営指針解説書」に食物アレルギーのある子どもへの配慮や緊急時の対応について記載があると思います。また、すでに受け入れ実績のある学童クラブなどに問い合わせるのも良いでしょう。

Q3 成分表示にはアレルギー物質が含まれていない場合でも、アレルギー物質(りんご、くるみ等)を使った製品と同じラインで生産されている物ですと表示を見ます。そのような場合は、商品そのものには、アレルギー物質が使われていない場合でも、摂取を避けたほうが良いのでしょうか？

A3 原材料表示の欄外に記載されている「同じ工場内で〇〇を含む製品を製造しています」などの表記を「注意喚起表示」と言います。食品製造の過程で、原材料としては使用していなくても、同じ工場内で製造されるために特定原材料が意図せずに最終加工食品に混入(コンタミネーション)する可能性があります。十分な対策を講じて混入リスクを完全には排除できない場合に、この表示が行われます。一方で、混入防止策を実施しても必ず混入する場合には、通常のアレルギー表示が必要です。ただし、注意喚

起表示は義務ではないため、記載がないからといって、同じ工場内で〇〇を含む製品が製造されていないという保証はありません。

注意喚起表示があっても、原材料表示に特定原材料表示がなければ、通常その食品を食べることができます。また、注意喚起表示には表示義務がないため、記載に注意する意義は低いとも考えられます。しかしながら、非常に微量のアレルゲン摂取で重篤なアレルギー反応の既往がある場合は、主治医とも相談してください。

Q4 アレルギー反応があるのですが、認めない保護者への対応方法について知りたいです。

A4 食事摂取後にアレルギー反応が見られる場合の保護者への対応方法として、回答いたします。

1. 医学的に説明する

アレルギー反応について医学的に分かりやすく伝えます。また、主治医や園医から説明をしていただくと、保護者の理解が得られる可能性があります。

2. 学校や園の対応方針を共有する

学校や園が統一した安全管理の方針に基づいて対応していることを伝えます。また、一人に対応せず複数人で対応すると効果的かもしれません。

Q5 乳幼児期の肌疾患（乾燥肌程度）からアレルギーは発症するのでしょうか。発症するのであればその予防方法、特に気をつけなければならないことについて教えてください。

A5 乳児期に見られる痒みを伴う皮膚の乾燥や湿疹の中には、その後アトピー性皮膚炎と診断されるものがあります。炎症が起こっている皮膚はバリア機能が低下し、アレルゲンが侵入しやすくなることでアレルギーの感作が進み、将来的にアレルギー疾患を発症するリスクが高まります。

予防策として、乳児期の早い段階から保湿剤を使用することでアトピー性皮膚炎の発症を防げるかどうかは、まだ議論の余地があります。しかしながらアトピー性皮膚炎の治療としての保湿剤の効果は明らかです。さらに保湿剤による予防効果は、もともと皮膚バリア機能が低下しておりアトピー性皮膚炎の発症リスクが高い乳児において、効果が高いことが示されています。そのため、リスクがあるお子さまには、適切なスキンケアとして保湿を心がけることが肌のバリアを守る上で重要と考えられます。なお、手に付着しているアレルゲンの感作を避けるためには、保湿剤使用前には手洗いをするのが重要です。

Q6 エピペンを打たれる痛さはどのくらいなのでしょう。やはり二人がかりで、一人がしっかり押さえて、一人が打つ方が確実でしょうか。

A6 エピペンは太ももの筋肉内に注射するため、ある程度の痛みを伴います。ただし、痛みの感じ方は個人差があり、状況によっても異なります。これまでの診療経験では、「強烈な痛みであった」と訴えられたことはありません。実際、高学年のお子さんの中には「痛みよりも、苦しさがなくなったことをよく覚えている」と話してくれたケースもあります。

注射時に動いてしまう可能性があるため、二人で対応し、1人がしっかり押さえ、もう1人が打つ方が確実です。しかし、緊急時に周囲に人がいない場合は、その場にいる人がすぐに打つことが優先されます。

Q7 アレルギー体質が子に移行されないために、妊活時期の食事について注意すること
はありますか。

A7 食物アレルギー発症を防ぐ目的で、妊娠中や授乳中に母親が特定の食事を除去することは推奨されていません。バランスの良い食事を心がけることが大切です。妊活中の食事に関するエビデンスは見つかりませんでしたが、妊娠中や授乳中と同様に食事制限をせず、さまざまな食品を適度に摂取することが望ましいと考えられます。

令和7年3月作成